

八角形の稲荷塚古墳と落合白山神社の三匹獅子舞用具

交通及び案内図（下部参照）

稲荷塚古墳（多摩市百草1140）

京王線聖蹟桜ヶ丘駅よりバス「落川」下車徒歩7分
（現地に石室の写真と解説有）

落合白山神社（多摩市落合2-2-1）

京王相模原線・小田急多摩線多摩センター駅より徒歩7分
※資料は非公開（9月の祭礼時に一部公開有り）

多摩市の文化財

現在は多摩ニュータウンの広がる多摩市にも、多くの特徴的な文化財が残されています。今回は、全国的にも希な八角形の都指定史跡・稲荷塚古墳と、平成19年4月2日に新しく市有形民俗文化財に指定した民俗芸能資料を紹介します。

八角形の稲荷塚古墳

稲荷塚古墳は、7世紀前半に造られた古墳で、全長は約38mを測り、7世紀の古墳としては都内最大級の大きさです。現存する墳丘は高さ約2mで、築造時の半分ほどですが、多摩地域で墳丘が残る数少ない古墳の一つです。

稲荷塚古墳の大きな特徴は、全国でも十数例しか確認されていない数少ない八角形の古墳であることです。八角形墳は7世紀中頃以降の天皇陵に採用された古墳の形態と以前は考えられていました。しかし、近年、群馬県や山梨県等の東日本でも、畿内より古い、7世紀前半頃の八角形墳が確認されてきており、八角形墳のあり方の再検討は必要ですが、稲荷塚古墳が希少で特異な存在であることに違いありません。

稲荷塚古墳のもう一つの特徴は、埋葬施設の石室です。石室は羨道部・前室・玄室の3室からなる横穴式石室で、精巧な切石を組み合わせて積み上げられ、造られています。そして、前室と玄室の壁が三味線の胴のようにカーブしていることから、切石切組積胴張り複室石室と呼ばれ、技術的にも卓越したものです。石室は現在、保護のため埋め戻され、内部は見学できませんが、平面形と大きさが分かるように墳丘部に表示しています。

稲荷塚古墳はその希少な形と特徴的な石室、規模の大きさから、古代多摩を代表する古墳として都指定史跡に指定され、保存されています。

落合白山神社の三匹獅子舞用具

三人一組で舞う、一人立三匹獅子舞と呼ばれる獅子舞は、関東地方に広く分布していますが、市内では落合白山神社のみに、その道具や衣装の用具類が現在まで大切に保存されていました。

落合白山神社の三匹獅子舞は、江戸時代から行われていたと伝えられていますが、昭和15年(1940)を最後に途絶えてしまいました。しかし、獅子舞が途

絶えてしまったことによって本来使い込まれ、作り変えられるはずの衣装類や道具類が当時のまま、タイムカプセルのように残された、大変希少な例であり貴重な資料です。



獅子頭（古）



獅子頭（新）

【種類】古・新二組の獅子頭と太鼓、撥、オキナ・ヒョットコの面、陰陽の採物、拍子木、法螺貝、笛、獅子舞の着物とタツケ袴、手甲、花笠の着物等の66点〔寛政5年(1793)銘のある祭禮道具箱の長持の附1点含む〕です。

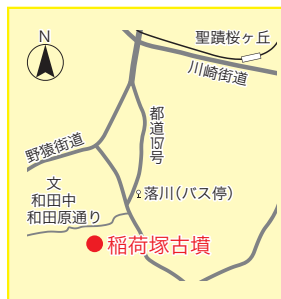
獅子舞の
タツケ袴



獅子舞の
着物



【特徴と時代】二組の獅子頭は江戸時代後半頃と推定されますが、より古いと考えられる一組の獅子頭は、枝分かれした角を持ち、近隣では類例がなく、獅子舞の伝播を考える上でも注目されるものです。また、採物の1点には明治24年(1891)銘が記されています。獅子舞、花笠の衣装類は何れも戦前で、特に、タツケ袴と手甲は、ウチオリと呼ばれる手織り機で織った自家製の本綿で、かつて機織のさかんであった本地域での貴重な資料です。本文化財は、江戸末期から昭和初期の多摩市域の民俗芸能を知る上で欠くことのできない重要な文化財です。



問い合わせ先

多摩市教育委員会生涯学習振興課文化財係
電話 042(338)6883